

報告3「教える集団で何を共有してきたのか—学ぶ集団をどのように組織するのか—」

根 津 知佳子（三重大学教育学部教授／学部長補佐（教育改革担当））

三重大学教育学部の根津と申します。2004年のFD委員会設置準備委員会以降、4年間、FD委員としてやってきました。2007年度からはカリキュラム改革特別委員会に入り、本年度は委員長をしています。今回は「教える集団をどのように組織するか」というとても大きなテーマをいただきましたが、経験の浅い私にはとても難しいテーマでしたので、「学ぶ集団をどのように組織するか」ということに焦点を当てて取り組んできたという立場から、「教える集団で何を共有してきたのか」というテーマに置き換えて報告させていただこうと思います。

お手元の論文集26ページの抄録に基づいて、スライドで補足する形で進めさせていただきます。

教育学部のカリキュラム構造として、教育学部には四つの課程があり、そのうち学校教育教員養成課程は国語や数学、理科、音楽などの13コースに分かれています。定員200名のうち、145名です。例えば私は音楽教育コースですが、音楽大学の音楽科とは違う学びをしています。音楽大学の学生は音楽に対する勉強、あるいは表現に対する勉強をしますが、教育学部の学生は言うまでもなく、音楽について専門に教える科目と、教職に関する科目を学びます。これは理学部の学びや工学部の学びなどと異なるのと同じように置き換えることができます。（スライドNo.2参照）

この学びの違いは教員の組織にも表れています。教育学部には教職専門の先生方と教科専門、教科教育の専門の先生方がいて、時にその専門の違いが壁になることがあります。しかし、教員がお互いに専門を認め合って、協力し合って授業を作ることができた場合は、学生にとって魅力的な教育ができるという可能性を秘めていると感じています。（スライドNo.3参照）

これは2004年度の教員着任年ごとの構成です。約100名の組織ですが、教員経験の幅が広いということが分かります。現在は、平均50歳、着任年数が15年となっています。異なる専門、異なる世代の教員同士が学生の学びを共有し、交流するにはどうしたらよいのかということをずっと考えてきました。そのときに、教育学部ですので、教育学部の学生が調査した資料が大変役に立ちました。（スライドNo.4参照）

これは学生が大学の授業をどのように認識し、何を求めているのかという調査の中の一つです。卒業したらすぐに教員としてベテランの先生と同じように働かなければならないからかもしれませんが、一見単位が取りやすい授業や専門的知識をすぐに得ることができるような授業を選択するようになるのですが、実は教師の教え方や内容について着目していることが分かります。

授業が下手でもいいから、その先生が真剣に研究に取り組む姿から多くを学ぶことができるとか、面白い授業よりも真剣に取り組んで苦しかったという授業の方が現場に出て思い出すことが多いというようなことも言われています。

この視点は重要ではないかと考えています。つまり、教える人と学ぶ人が教える方法だけではなく、いかに授業の内容に向かい合うかということが大事だということです。ですから、授業評価には学生とのコミュニケーションの技術や教育技術の向上という観点がありますが、むしろ教員がきちんとその専門性に向かい合うことができている、それが守られていて、点数によって裁かれたり侵されたりしない、それを守るということがFDの活動で大事なことはないかと考えました。

幸いにも教員同士の実践の交流がずっと続いていて、授業を参観するだけにとどまらず、共同の教材開発や教員が学生となって相互の授業を受講するなど、三重大学の教育学部では、学生の目線で教育の改善が進められていました。このような体験を通して大事にしたかったことは、教員も学生から学んでいるという手応えや感覚でした。

そこで、日常性へのつながり、異質な者同士の理解、多様な領域の認識をキーワードとした活動として、学生の自主性、主体性を基盤にしたボトムアップ的な活動、学生や大学院生、附属学校教員や職員も参加できる活動、教員と学生の双方向の対話を重視する活動を展開してきました。主に重なるの部分に着目して活動を展開したということです。（スライドNo.5参照）

象徴的な活動は、「教員と学生が語る会」です。教員と学生が大学での授業や教育学部で学び合うことをめぐって、

ひざを交えて話し合える場を目指しました。(スライド No. 6 参照)

特に地方大学ですので、同じ年齢の世代から学ぶ機会が少ないので、コースを越えて学生同士が学びあうということを重視しました。

例えばそのポスターも、デザインを学んでいる学生が学んだことを発揮できるように、学生に依頼しました。このように、自分の学んだことが自分の学んでいる大学で披露できて、その手応えを感じることができるということを大事にしましたが、これは逆に考えると、教えたことをどのように学生が活かしているかということを教員が手応えとして感じるということにつながると思います。

学生による授業改善のためのアンケートについても、教員のコメントをウェブ上に公開しています。私たちは、授業を作るのは教員と学生だと考えています。評価の結果が教員に戻されても、その授業の単位をもらってしまって、その授業に戻ってこない学生には還元することができないので、私たちが最初にやったことは時間差や温度差というものを課題としてとらえて、評価をしたら終わりではなく、その結果をめぐって教員と学生が対話することを重視しました。その対話が将来、教師という評価者になっていく主体を育てていくと考えました。(スライド No. 7 参照)

こうした取り組みについて、松下佳代先生に「プロジェクト型 FD」であると教えていただきました。先ほどアクション・ラーニングという新しい概念を知りましたが、共通点があるのではないかと考えています。FD という名前の付いていないところで、本来の FD 活動が数多く行われていることと、学生のための教育プロジェクト、新たな試みを構想して実践、評価、改善をしていく中で、教員自身も学生と一緒に教育能力を向上させていくことを評価していただきました。

これは、2006 年のプロジェクト型 FD の課題ですが、このときには「実践的指導力」ということをプロジェクトのテーマに設定しています。(スライド No. 8 参照)

その後も教員同士の交流の場として、「教員と教員が語る会」を開催しました。この会では、新任教員の研究を紹介したり、食べる、歌うなどの日常性をテーマとしたワークショップを開催したりしました。しかし、参加するメンバーが固定されて、温度差を感じるようになりました。また、年々会議が多くなり、授業終了後に活動を設定しにくくなったことも集まりが悪くなってきた原因として挙げられます。そこで、全員が集まる場で何かをやることを目指して、教授会開始 30 分前に情報交流の場、「FD カフェ」を始めました。気軽に参加できる場ということをイメージして、「FD カフェ」という名前にしています。(スライド No. 9 参照)

教育学部には、数年かけて取り組んでいるプロジェクトがいくつかあります。資料のグラフは横軸が着任した年代、縦軸は人数を表しており、プロジェクトに関わっている教員数を並記しています。

まず 2006 年に GP に採択され、現在も続いている隣接学校園との連携が挙げられます。この取り組みでは、大学に隣接する中学校区で学生が実地研究を行うのですが、地理的に好条件で足を運びやすいので、教員も一緒に行って体験の振り返りができるようになりつつあります。(スライド No. 10 参照)

次に、中国の天津師範大学とのダブルディグリーがあります。これは日本語教育に関するカリキュラムを学部全体で考えるという先駆的な取り組みだと考えています。三重大学の教員が天津師範大学に派遣されて中国で授業をするというもので、同じカリキュラムを日本と中国でやるわけで、あらためて日本の教育について考えるいい機会になったという声をよく聞きます。(スライド No. 11 参照)

先ほどのカリキュラム構造で、真ん中の教員養成コア科目群には、「教育実地研究基礎」、あるいは「教職入門」、「特別支援教育入門」などの教育実地研究科目があります。(スライド No. 12 参照)

これらのプロジェクトにかかわっている人は半数以上に達しました。(スライド No. 13 参照)

三つのプロジェクトにかかわっているメンバーの人数や構成は異なりますが、大まかにいって、2000 年以降に着任した人たちの担当数が多いということが特徴として挙げられます。法人化の影響もあるかもしれませんが、2004 年以降の FD 活動で教員同士の交流が活発になったということもあるのではないかと思います。(スライド No. 14 参照)

また、各年代で同じような人数構成になっていますが、それぞれ異なる固有のつながりがあるということが今回分かりました。もちろん複数のプロジェクトにかかわっている人もいますが、それぞれの専門や興味に即して自主的に参加するプロジェクトの選択の余地が必要なのではないかと思います。自分で選択したプロジェクトに関しては、責任を持って参加して、交流が図られるはずで、このような意味で、「プロジェクト型の FD」は学部、コースを越え

た交流だけでなく、地域貢献や国際交流へと発展していると思います。また、実践的指導力をめぐって、他学部の方や他大学の学生同士の交流も盛んになってきました。

このように、FD活動を基点としたつながりは拡大していきました。先ほども授業を作るのは教員と学生であるということを確認しましたが、専門領域の違いや教育学部に集う者同士の差や違いを壁とするのではなく、豊かさとしてとらえ直すためには、これから第2段階、第3段階としてどのような場を生み出して、何を共有していけばいいのかということについて今年度、特に考えました。

松下先生を中心にこのような図を提唱されていますが、実践と研修、制度化と自己組織化という二つの軸によって、FD活動を分類しています。（スライド No. 15 参照）

これまでお話ししたような三重大の取り組みは、いずれも自己組織化でボトムアップ的なものだったように思います。この数年、GPだけではなく、学内のCOEや学長裁量、学部長裁量の研究グループも多くありましたが、どんなに一生懸命やっても、それがカリキュラム改革や学部の授業の改善に直接結び付いていかず、全員で共有できないというような温度差を感じていました。つまり、「プロジェクト型のFD」をもう一回見直す必要が生じたわけです。この後はそれについて説明したいと思います。（スライド No. 16 参照）

今年度の取り組みは二つありました。クロレベルになるかもしれませんが、一つ目は、この春入学する学生に必修とする「教職実践演習」の設置と、生活科の授業という今までずっと問題になっていた授業の改善です。つまり、図の中央で示される狭義のFDを避けていましたが、今年度はこれについて触れることになったわけです。「教職実践演習」は、教員養成の総まとめとなる授業なので、教育学部の全員の教員がかかわってほしいと考えました。（スライド No. 17 参照）

また、二つ目の生活科は、生活科の専門の先生がいないことから、これまで幾つかのコースがグループを作って、持ち回りでオムニバスに運営してきました。その結果、どの担当のグループに当たるかによって体験が異なることから、学生からも苦情や改善の要望が出ていた授業の一つでした。

この二つの授業は内容も目的も異なりますが、共通していることは、みんなが分からない、はっきりしていないとっていて、どうしていいか分からないということでした。そこで、全員でそのこと、つまり「わからなさ」を共有するのはどうかという発想に至り、カリキュラムを共有するために授業を共有する、そこであらためて同じ時間に全員がかかわるということで、テーマをもう一回見直すという仕組みを考えました。（スライド No. 18 参照）

これは大まかなものですが、A、B、C、Dというのが学生のグループです。4色に分かれています。これは一人の教員がAグループに行った後、次に違うグループに行くということで、一人の教員が全員の学生と一緒に勉強をするという仕組みです。

この改善として、具体的に生活科の授業に関しては水曜日の2コマに四つのグループの授業を同時開講して、2年生の必修授業とするという方法を提案しました。この時間帯は授業が多く、不満に思う先生方も多いはずですが、教育学部に最も教員が集まる時間をわざわざ選んだのは、長年かけても解決しなかった難しい問題を全員で共有して解決しようと考えたからです。（スライド No. 19 参照）

つまり、今まではボトムアップでしたが、同時開講はむしろ上から下に下りていくような流れのFDかと思います。しかし、軌道に乗れば学生の学びの平等性も確保されますし、授業の交流なども行われ、自主的な交流も行われるのではないかと考えています。

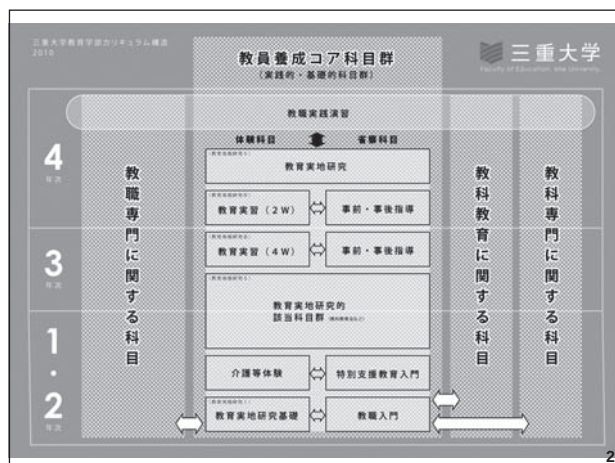
この成果や問題がはっきりするには時間が必要ですが、現在は例えば水曜日の2コマ目、日常の授業で異質なものがつながって、多様な領域を学生が理解、認識する場、仕組みを作ったということにより、全教員が「未知なものを共有」して対話することができるのではないかと考えています。（スライド No. 20 参照）

私たち教える集団が共有するのは、学部全体のカリキュラム改革であって、ボトムアップ型のFD活動は今そこに向かって新たな展開を始めています。ありがとうございました（拍手）。

（溝上） 根津先生、どうもありがとうございました。もうお一方のご報告を拝聴したいと思いますので、もうしばらくご辛抱ください。その後に15分休憩に入ります。それでは義本さま、よろしく願いいたします。

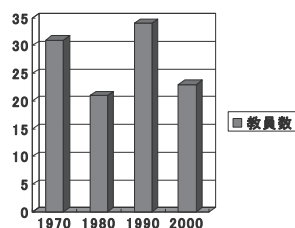
教える集団で何を共有してきたのか
学ぶ集団をどのように組織するのか

三重大学教育学部
根津知佳子



教える集団の特徴

- ・幅広い世代
- ・教育歴の違い
- ・多様な専門領域
- ・研究棟 (数ヶ所)
- ・共有の場は月1回



3

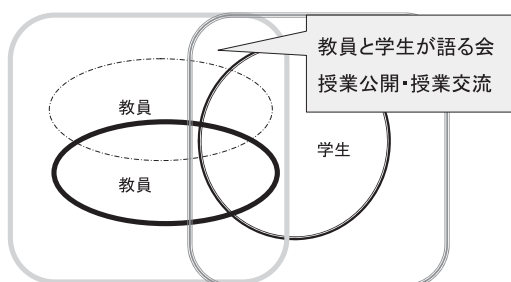
学ぶ集団は授業の「何」をみているか

- ・授業内容 46%
- ・カリキュラム・制度 20%
- ・教員の授業態度 12%
- ・教員の教育技術 5%
- ・教育環境整備 2%
- ・学生 6%
- ・大学 1%
- ・その他 8%

「三重大学教育学部教育心理学FD研究会」による研究(2004)

4

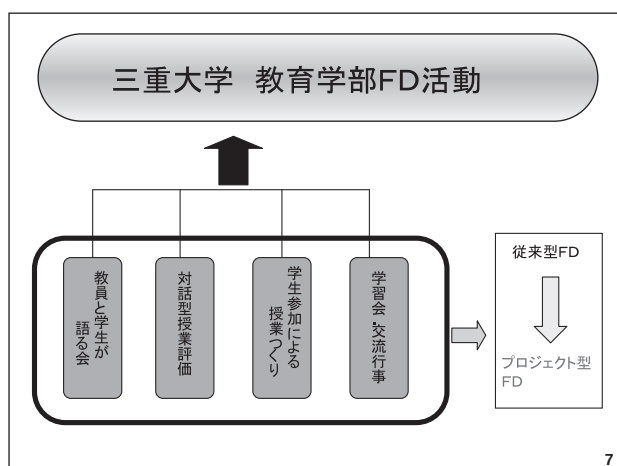
学ぶ集団をどのように組織するか



「教員と学生が語る会」のテーマ



6



7

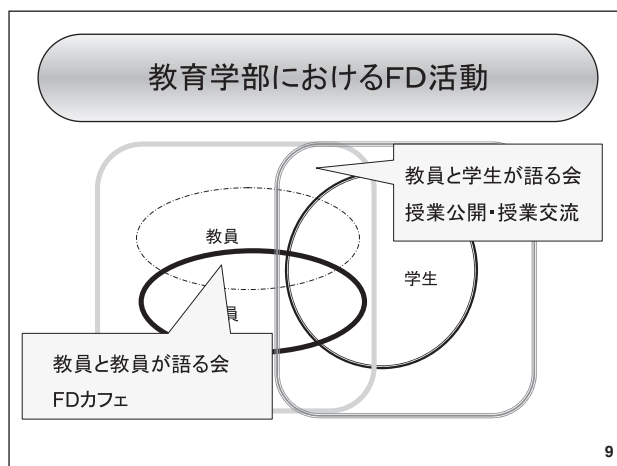
プロジェクト型FD(2006)の課題

- FD委員会は、プロジェクト型FDの推進を基本的な方針としている。もとより、プロジェクト型FDの根幹は、どのような課題を設定するかという点にある(2006年教授会)。

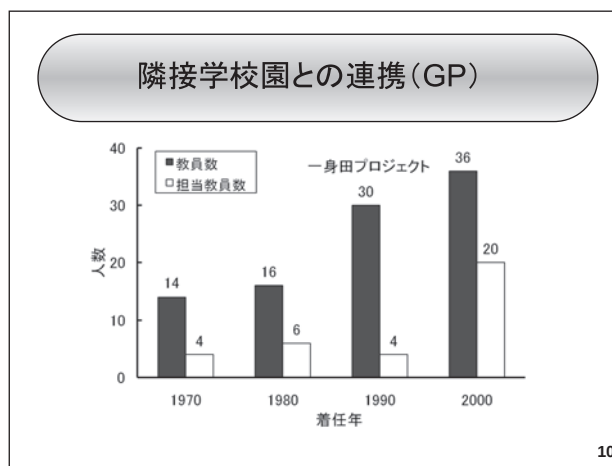
→ 実践的指導力をテーマに設定

- 学生に“力”をつけるための教育改善
- インフォーマルなコミュニティとフォーマルな組織の連携
- ボトムアップとトップダウンの融合

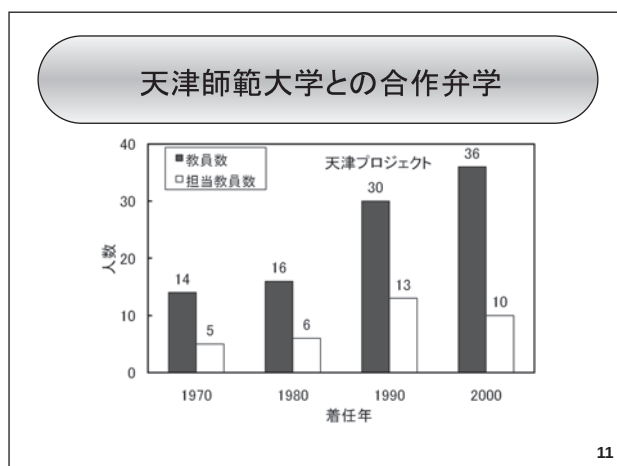
8



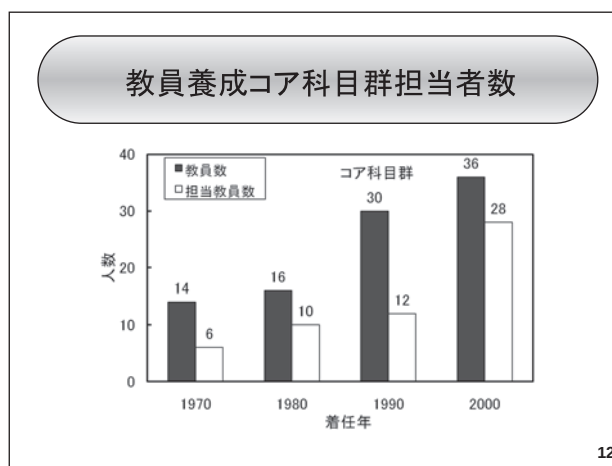
9



10

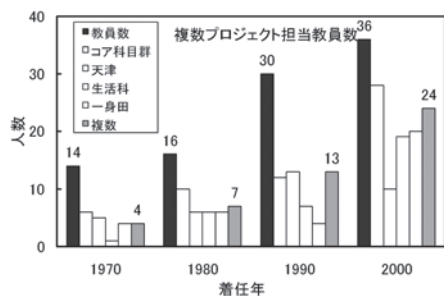


11



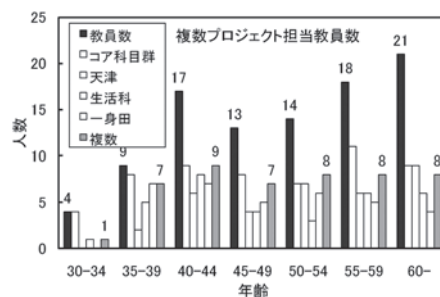
12

複数プロジェクト担当教員数



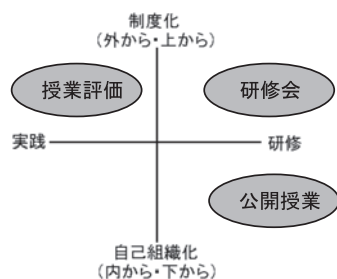
13

複数プロジェクト担当教員数



14

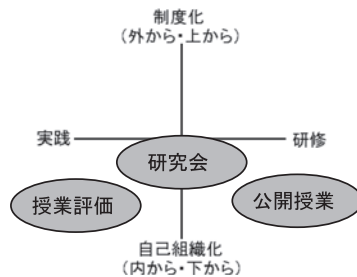
FDの類型



（松下佳代、2006）

15

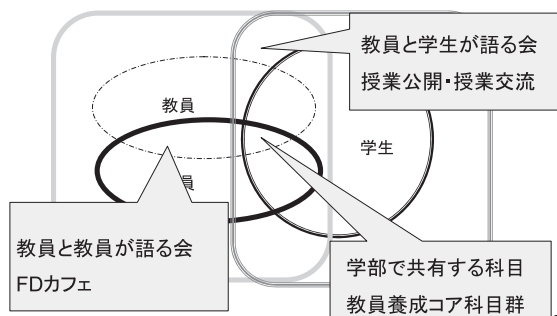
FDの類型（2004—2006）



（松下佳代、2006）を改変

16

教育学部におけるFD活動



17

学ぶ集団をどのように組織するか

	1	2	3	4	5	6	7	8
A								
B								
C								
D								

18

学ぶ集団をどのように組織するか

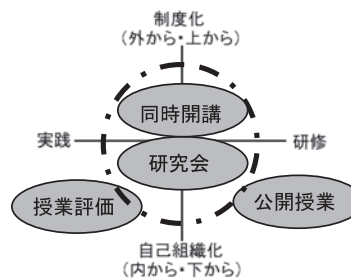
- ・学生を4つのグループ（約20人）に分ける。
- ・同時に、各グループごとに授業を実施する。
- ・各教員が特定の内容を担当する。

（例）教員A：学校の役割、教員B：現代の教育問題、・・・

授業日 学生	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週
グループ1	教員A	教員B	教員C	教員D	教員E
グループ2	教員E	教員A	教員B	教員C	教員D
グループ3	教員D	教員E	教員A	教員B	教員C
グループ4	教員C	教員D	教員E	教員A	教員B

19

FDの類型（2010～）



（松下佳代、2006）を改変

20